



## 特 集

# 東日本 から学ぶ

安城学園は、これからも東日本の人たちとの絆を深めて交流を続けていきます。

東日本大震災から4年近くが過ぎ、新聞やテレビでその話題が取り上げられることが減ってきました。しかし復興の足取りは依然として重く、社会全体としての継続的な支援が求められています。安城学園では多くの学生、生徒、園児、教職員が現地を訪れ、震災直後から様々な形の支援を続けてきました。これらの活動からは多くの交流も生まれ、そして東日本の人々の逞しさや、日本の発展に果たしてきたこの地域の役割の大きさを学びました。そこで安城学園と東日本とのつながり、今までの主な活動の姿を記します。

### 東日本から学ぶプロジェクト活動実績

#### ●愛知学泉大学

- ・被災地支援ボランティア（豊田学舎 H23、野球部 H24、岡崎学舎 H25,H26）
- ・被災地支援スポーツ教室（女子バスケットボール部 H24）
- ・東日本と愛知を繋ぐコンサート（オーケストラ H24,H25,H26）
- ・サンマ祭り（豊田学舎 H24,H25,H26、岡崎学舎 H25,H26）

#### ●愛知学泉短期大学

- ・被災地支援ボランティア (H25,H26)
- ・サンマ祭り (H25,H26)

#### ●安城学園高等学校

- ・大船渡七夕ボランティア (H23,H24,H25,H26)
- ・被災地支援ボランティア（野球部・男子サッカーチーム H23,H24,H25,H26）
- ・被災地支援スポーツ教室（女子バレーボール部 H24）
- ・東日本と愛知を繋ぐコンサート（弦楽部・合唱部 H24,H25,H26、吹奏楽部 H23,H26）
- ・地歴公民科東北セミナー (H24,H25,H26)
- ・大船渡東高等学校との交流 (H24～)

#### ●岡崎城西高等学校

- ・被災地支援ボランティア (H24,H25,H26)

#### ●愛知学泉短期大学附属幼稚園

- ・支援物資販売 (H23～)

#### ●愛知学泉大学附属幼稚園

- ・支援物資販売 (H23～)

#### ●愛知学泉大学附属桜井幼稚園

- ・卒園児による被災地訪問 (H24)
- ・支援物資販売 (H23～)

#### ●安城学園全体事業

- ・東日本から学ぶ連続講演会 (H24)
- ・創立100周年記念酒醸造 (H24)
- ・東日本から学ぶプロジェクト基金 (H24～)

# 愛知学泉大学・愛知学泉短期大学



加藤 彩菜さん

愛知学泉短期大学生活デザイン総合学科2年。菅瀬ゼミ。得意のパソコンによるデザインづくりを活かしたうちわ作りや、炊き出しのカレーづくりを行なう。



鈴木 諒君

愛知学泉大学政学部家政学科政学専攻1年。岡崎キャンパスのボランティアサークルに所属。カレーづくりやポールゲーム等を担当。震災直後から被災地に何度も足を運んでいる。先の大学祭では実行委員も務めた。



小田 叶さん

愛知学泉短期大学生活デザイン総合学科2年。木村ゼミ。安城学園高校時代は弦楽部員として現地の演奏会に参加。手紙のやり取りなど定期的な交流を続いている。

昨年8月、大学・短大の学生33名と教員4名が、いまだ復興途上の宮城県・岩手県の仮設住宅を訪問し、日頃ゼミで学んでいるスケルを活かした交流を行なってきました。参加者はそれぞれ「忘れないこと」「続けること」の大切さを再認識し、さらに自分たちの足元を見つめ、「地域のつながり」、「震災に強い街づくり」を考えるきっかけにもなったようです。

東北大震災から4年近くが経ち、人々の記憶の中からその痛みの記憶が少しづつ消えつつある昨今ですが、被災地の復興は遅々として進まず、高齢化や過疎化、そして心の問題等が課題となっています。今回訪問したのは、安城学園と縁の深い宮城県気仙沼市の小学校と岩手県大船渡市の仮設住宅です。学生たちは事前研修を重ね、岡崎市の高齢者とジャムを作り、短大幼児教育学科が育てた野菜を持ち寄るなど、様々な人の思いを胸に現地を訪ねました。

短大生活デザイン総合学科・菅瀬ゼミの加藤さんは、「普段の勉強を活かし、PCでイラストを作つて出力し、子どもたちとうちわやランチョンマット作りをしました。気仙沼の大島小学校へ行ったのですが、いきなり大勢で訪ねたので最初は怯えてしまう子や泣いてしまう子もいました。」無理ありません。普段は静かな島暮らしをしている子どもたちからすれば、遠方からきた初対

面の学生がいきなり遊ぼうといつても、全員がすぐに心を開けるわけはないでしょう。「その時、子どもたちの気持ちが痛いほどわかりました。だから本当の姉になつたつもりで接して、褒めて、自分自身も心から楽しみました。」初めは写真にも写ったがらなかつたのに、帰る頃にはだっこした膝の上から離れない子もいたといいます。「生活物資を送るだけではない心の繋がり、相手の気持ちに沿った思いやりの大切さを痛感しました。」

大学家政学部の鈴木君は、震災直後から何度も東北を訪ねている「ベテラン」です。今までに通算6～7回は現地に足を運び、瓦礫の撤去から掃除までできることは何でも引き受けました。そんな彼らを見て、現地でいつもお世話になつてゐる旅館の娘さんは今年春、わざわざ寮に入つて鈴木君の母校の高校に入学したといいます。「田んぼに埋まつたガードレールを引きずり出したら、アルバムや免許証が出てきて泣き出していました。初めはボランティアに行つた人が心を痛めることも多かつたんです。」

さらば仮設住宅の人たちの気持ちにも変化があるといいます。「最初は『来てくればありがとう』だったのが、今では『忘れられるのが怖い』とおっしゃるんです。それだけ人と結びつきを求めてらつしやるんですね。」何度も現地に足を運んでいる鈴木君だからこそわかる、心の声がここにはあります。「震災という極限状態を経て、人が生きいく上で地域の結びつきがいかに大切かがわ

かりました。南海トラフ地震だつていつ起こるかわかりません。決して他人事ではないんです。」岡崎キャンパスのボランティアサークルに所属し、また大学祭実行委員を務める鈴木君は、この思いを胸に、昨年大学周辺の家を一軒一軒回つて大学祭のチラシを配りました。その結果2日間で5千人が来場。大学が地域に根差してきたことを実感しているといいます。

一方、短大生活デザイン総合学科・木村ゼミの小田さんは、安城学園高校時代に弦楽部に所属、大学オーケストラ部とともに現地の演奏会に参加しました。「オーケストラを初めて見た方も多く、喜んで頂けたのが嬉しかつたです。でもその時は地元の人と話すことはあまりできず、ぴんとこない部分がありました。今回は地元の人としっかり話すことができ、暮らしの状況や気持ちを聞けたのが勉強になりました。」

もともと木村ゼミでは、木村先生のご実家で収

## 先生からひとこと

愛知学泉短期大学生活デザイン総合学科  
木村 典子准教授



岡崎キャンパス学生会顧問  
愛知学泉短期大学  
生活デザイン総合学科  
菅瀬 君子教授



普段、情報もネット経由でリアルタイムに手に入れている学生ですが、生身の人間の心の声を身体で聞いてほしい。そう思つて学生を連れて行きました。実は行く前は不安で行くのを拒む学生が8割近くもいたんですよ。それが実際に現地に行ってみると気持ちが大きく変化しました。現地現物、頭でなく心と身体でぶつかることの大切さを再認識し、現地の方々の温かいご支援のおかげで人として大きく成長してくれました。

阪神淡路大震災の時は医療関係者として神戸に行きましたが、今回は別の意味で、地に足の着いた交流ができました。宮城と岩手の復興の差や、奇跡の一本松で有名な陸前高田市での大規模な高台造成工事など、思うところの沢山ある貴重な体験でした。学生たちは小さな失敗や発見を繰り返し、大きな成長を遂げてくれました。



大船渡七夕ボランティアでは、安城七夕まつりではおなじみの「願いごと短冊」を現地の方に書いていただき、山車を引くお手伝いなどもさせていただきました。

束

日本大震災の起きた2011年から毎年  
行っている「大船渡七タボランティア」。

今年度も安城学園高校の生徒たちは岩手県大船渡市へと向かいました。この活動をきっかけに岩手県立大船渡東高校との交流を重ね、生徒同士の強い結びつきもできました。七夕ボランティア、そして生徒会として活躍した加納咲里さんと中根翔君、生徒会主任の和田圭吾先生に尋ねました。

中根君：「1年生の冬、生徒会の街頭募金に参加した時、現地は一体どうなっているのかと思いました。そこで、七タボランティアの説明会で現地の映像やドキュメンタリーを見せてもらいました。映像を見たときは、自分では何もできないのではと思いましたが、それでも何か一つは残そうと思い、相手に笑顔になつてもらうことを目標にして行きました。」

が、先輩の話を聞くうちにそんな自分を乗り越えなきやと思い、行くことを決めました。実際にやってみると地元の人たちがすごく温かくて、杞憂だつたとわかりました。3年生の時に不安や緊張はなく、すんなり参加しました。

卷之三

ボランティアに参加して得られたものや、自分の中で変化したことはありますか？

思います。今回も前回と同じように笑顔が見られたし、人々が温かいと感じました。もつと家族のような交流を目指していきたいです。」

から踏み出す一歩では、景色が違うことを感じてほしいです。」

から踏み出す一歩では、景色が違うことを感じてほしいです。」

加納さん「卒業後も、個人的に東北に行きた  
いです。初めは不安や緊張もありますが、『樂  
しかった』という思いは行かなければ分かりま  
せん。体験した人の話を聞けば自分も行きたい

「 という人が増えていくと思います。一人でも多くの人に現地へ行ってほしいです。」

和田圭吾先生からひとこと

(年生)  
身。  
委員へ所属  
会長に。  
とも積極的

コミュニケーションは苦手だったんです。自分の

言葉で相手を傷つけるのではと思い、また相手の  
思いを知るのも怖がったんです。最初のボラン  
ティアでは特に、話を聞いていいのか不安で、言  
葉にもすごく気をつけました。打ち解けてからは  
深い話も聞けるようになりましたが、それまでは  
精神的にすごく大変でした。でもその壁を乗り越  
えられたから今の関係があると思います。」

これからに向けて

中根君：「先輩たちの活動を途切れさせないよう、自分から行動してこの活動の意義を皆に伝えていきたいです。今回、僕は自ら動く大切さを学びました。人に言われて動く一歩と、自分で



加納 暁里 さん (3年生)

岡崎市立北中学校出身。  
2014年度前期生徒会長を務める。  
今回で東北ボランティアへ行くのは3度目で、大船渡に親友と呼べる友達もできた。



由根 翔君 (2年生)

幸田町立南部中学校出身。  
1年生より学園祭実行委員へ所属し、2014年度後期生徒会長に。  
大船渡東高校の生徒会とも積極的に交流を図っている。

# 岡崎城西高等学校



中川 敦盛 君 (3年生)

愛知教育大学附属岡崎中学校出身。  
現インター部副部長、元生徒会執行委員。  
介護士である母親に薰陶を受け、  
将来は社会福祉士を志す。



山口 直也 君 (3年生)

岡崎市立額田中学出身。  
2014年度前期生徒会長を務める。  
人をまとめる大変さを痛感すると  
共に、相手のために何をすべきか  
を考えるようになる。

**岡** 崎城西高校は、東日本大震災復興支援ボランティア活動を続けて今年で3年目。きっかけは、あるクラスの担任がいちご農家へボランティアに行つたことでした。その翌年からは学校全体で復興支援を行つており、今年度は教員6名、生徒80名の計86名が宮城県の南三陸町と石巻市を訪れました。震災から4年目となつた今を見て何を感じたのか、この活動の中心となつて動いてくれた山口直也君、中川敦盛君、そして引率教員の森田佳和先生に話を聞きました。

中川君：「僕は、東北支援へ行くのは今回で2回目でした。前回はインター部として行い、その時の経験を生かしてもっと効率よく動くぞ」と気合を入れて行きました。」

山口君：「前回は都合が合わず行けなかつたので、今回こそはと思い参加しました。時間のあら高校生のうちに自分の目で被災地を見て、こ

中川君：「A班の行った南三陸町は、道路と瓦礫が少しあるだけで、もともと家が建つていたところが手つかずのまま更地で広がつてしまつた。お手伝いに行った商店街も、プレハブでできた仮設商店街といった感じでした。夕食後は、志津川の仮設住宅を訪問しました。雨のため、準備していたbingoゲームや花火はできませんでしたが、その分色々な話を聞きることができます。」

山口君：「僕はB班でした。こちらも雨で計画していた草むしりを中止し、集会場の掃除をしました。それでも、夕方過ぎには雨はやみ、ジャグリングを披露したり、bingo大会や花火大会を行なうことができました。石巻市は、海側は津波で流されてしまい、ほとんど何もなかつたのですが、内地の方は山が津波を止めてくれたらしく、被害は少なかつたですね。地域差はありますねが、まちの中心は機能していました。」

## 印象的だったことは？

中川君：「2日目にたまたま入った飲食店で、

店員さんと話をしていたら、「この店も膝上まで水が来たんだよ」と言われることが印象に残っています。今では当たり前のように営業して人が出入りしている場所でも、3年前には震災や津波の被害にあつたのだと改めて考えさせられました。今回一緒に東北へ行ったメンバーの中には、石巻市役所の2階でカフェを運営して

山口君：「入学するまでは被災地へ行くなど考

えたこともなかつたので、学校がこの機会を用意してくれて本当にありがたいと思います。震災から3年経つと、徐々にその事実も風化してしまうこともあります。東北のものを買つたり、継続して募金を続けたりするなど東日本大震災を忘れないようにして、東北支援を続けていきたいと思います。」

## 森田佳和先生からひとこと

初めは、生徒の言動や行動で被災地の方を傷つけないか、本当に役に立つか心配でした。しかし、実際向こうに行くとよくやつてくれましたね。楽しそうに会話をしていたので安心しました。交流を通して生徒たちも何かを感じてく

れから何をすべきか考えようと思つたんです。」

な体験ができたと感じています。」

山口君：「ある被災者の方の話は印象的でした。その方は川沿いの内地に住んでおり、津波のこ

となど想像もしていなかつたそうです。逃げ遅れそうになつて、海側から来た人が車に乗せて助けてくれたそうですが、その話をとてもこやかに笑顔で話すんです。震災で知り合いもたくさん亡くなされたのに何故笑顔で話せるのかと不思議に思つていると、同じ疑問を持つた人が質問してくれました。すると、「悲しみでいても仕方ない。みんなの分まで生きていかなければいけない」と答えておられ、強く生きる東北の人を感じました。」

## 今回の体験をどう感じていますか？

中川君：「現地に足を運べる人は赴いて、現状

を自分の目で見てきてほしいです。実際に行つてみて、自分の無力さを知ると共に、僕たちの力でできる復興は減つていると感じました。だからこそ、現地の人と交流したり被災地を見学したりして、もっと東北のことや震災のことを知つてほしいと思います。」

山口君：「入学するまでは被災地へ行くなど考

えたこともなかつたので、学校がこの機会を用

意してくれて本当にありがたいと思います。震

災から3年経つと、徐々にその事実も風化してしまいます。東北のものを買つたり、継続して募金を続けたりするなど東日本大震災を忘れないようにして、東北支援を続けていきたいと思います。」



仮設住宅の方にスライドで震災前後の写真を見せいただき、被災体験を聞かせていただきました。



震災の傷跡が生々しく残っている石巻駅。未だ復興は進まず、がれきが残っている。



仮設住宅訪問では、天候があやしくなつたため、bingo大会を変更し「じゃんけん大会」を行いました。景品は、晴れいたら行う予定だったスイカ割りの「スイカ」です！